



ISSN 0385-0838

第 110 号

発行所

亜細亜大学アジア研究所

東京都武蔵野市境5-24-10

電話 0422 (54) 3111

郵便番号 180-8629

# 南部にみるドイモイと成長の息吹き

木村 哲三郎

ベトナム経済は二十一世紀に入ってからかつての勢いを失ったかのように見える。ドイモイについても語られることは少ない。しかし南部のホーチミン市やメコン・デルタを見るかぎり、経済は活況を呈し、市場経済化の波は勢いを増している。ベトナム経済の成長もドイモイも南部経済の発展によって推進されることは間違いない。以下は現地における南部経済の発展と市場経済化の現状である。

## 外資と農産品輸出

先ずベトナム経済全体の現況を確認しておく

う。ベトナム経済は一九九二年から一九九七年まで六年間連続して八%から九%の成長を遂げた。この間の工業成長率は十三%から十四%の水準であった。工業・建設がGDPに占める割合は一九九〇年の二二・七%から二〇〇〇年には三六・六%に増加した。このような工業の成長には外国からの直接投資が大きな役割を果たした。ドイモイの一環としてベトナムは一九八八年外国投資法を公布し、外国企業の力を借りて工業化を推進することになった。外国投資法の改正および輸出加工区の設定の結果、ベトナムへの外国直接投資は急速に増加して行った。一

## 目次

南部にみるドイモイと成長の息吹き	木村哲三郎	(1)
イラン(ペルシャ)建国物語『王書』の三部構成と『古事記』の三巻構成	夜久 正雄	(4)
最近の韓国政治経済情勢	野副 伸一	(6)
中国・農民労働者の都市流入規制を緩和	小林 照直	(10)
『アジアの窓』馬・牛・鶏	高殿 良博	(12)
アジア研究所だより		(12)

九九〇年に八億三九〇〇万ドルでしかなかった外国投資は一九九二年二億六五〇〇万ドルと初めて二〇億ドルを超え、一九九六年にはピークの八四億九七〇〇万ドルを記録した。アジア経済危機で一九九九年に一五億六八〇〇万ドルに落ち込んでからその後の回復の足取りは鈍い。しかし一九八八年の外国投資法の公布以来二〇〇〇年末まで、件数三一七〇件、認可額三九一億ドルの外国直接投資が行われた。一九九五年に外資系部門の生産はGDPの六・三〇%を占めていたが、二〇〇〇年のそれは一三・二五%であった。工業総生産では外資系部門は一

九九五年に二五・一%を占めたが、二〇〇〇年には三五・五%にそのシェアを拡大した。一九九五年に外資系部門は二〇万の労働者を直接雇用していたが、二〇〇〇年には三四万人を雇用している。世界銀行は間接雇用者を一〇〇万と推計している。一九九五年の輸出額の八・一%が外資系企業によるものであったが、二〇〇〇年には二三・二%に拡大している。ベトナムの投資額はGDPの三〇%前後を占めているが、ピーク時には総投資額の三〇%が外国投資によって賄われた。ベトナムの高度成長を支える柱の一つが外国投資であることは明らかである。

もう一つの柱はドイモイで復活した家族経営による農業生産の増加である。一九八八年の政治局第一〇号決議によってベトナムの農民は土地の使用権と経営自主権を獲得した。殆んど強制的に集団化の道を歩まされていた南部の農民はその桎梏から解放されて生産に励んだ。先ず米の作付面積が増加し、ヘクタール当たりの収量が上昇した。粗生産高は一九九二年の二一六〇万トンから二〇〇〇年には三二六〇万トンへと一〇〇万トンも増加した。一九八〇年代まで穀物輸入国であったベトナムは一九九〇年代、世界第三位のコメ輸出国となった。一九九九年の米輸出量は四五〇万トン、金額にすると一〇八〇百万ドルである。米の生産増加を主要因として、一九九二年から一九九七年まで農業は年平均六・五%近い高成長を遂げた。米を中心とする農産物の輸出額は一九九五年で全輸出額の三二%を占めていたが一九九九年で米産物も含めて二四・三%になっている。しかし米生

産の急速な成長は他方で農業の多角化を生んだ。果樹や野菜、工業用作物さらには水産業の発展をもたらした。このため、農林産物と水産品が全輸出に占める割合は合計すると二〇〇〇年でも三〇%を超えている。農業は依然としてベトナム経済成長の柱の一つなのである。

### 中国の台頭と世界経済の減速

二〇〇〇年からのベトナム経済の成長率は六%から七%の間を上下している。七%から八%の成長を維持している中国と比べるとやや遜色があるが、他のアセアン諸国の良くて四%に比べれば、ベトナムは優等生の部類に属する。しかし遅れて工業化の道を歩み始めたベトナムは先発アセアン諸国と同じレベルの成長率に甘んじている訳にはいかない。七%以上の成長を必要としている。

ベトナム経済がかつての七%以上の成長を回復できない原因として次の二つを指摘できるだろう。一つは工業の成長率が一〇%を切つて二〇〇二年には八・八%に落ち込んだことである。工業成長率の低下は外国直接投資が仲々かつての水準を回復していないことに因る。二〇〇〇年に一九億八九二〇万ドル、二〇〇一年に二二億九三三〇万ドルと低迷し、二〇〇二年は一十一月で前年比マイナス四七%の一・七億ドルに減少した。これは中国へ投資が集中したためである。ベトナムが外資をめぐって圧倒的に大きい国内市場を持つ中国と競争するためには余程魅力ある投資環境を整備しなければならぬ。国営企業の民営化などドイモイの一層の推進が必要である。

他の一つは世界経済、特に日・米・欧の先進国経済の減速である。このため輸出の伸び率がかつての二〇%から一〇%以下に落ち込んで来ている。おそらく二〇〇二年の貿易収支はさらに赤字が拡大したと思われる。特に一次産品価格の低迷で米やコーヒーの輸出量が減少している。

二〇〇一年四月に誕生したノン・デク・マイン指導部は外資を引き寄せよう投資環境を整備するとともに国営企業の改革や国内民間企業の育成に力を入れているが、七%台の成長を維持して行くことは難しい。以上は外部からの見方であるとともに首都ハノイで専門家と会い、全国レベルの数字を検討した印象であるが、南部のホーチミン市やメコン・デルタの活気に触れるとベトナム経済の前途は明るいのではないかという気になるのである。

### ホーチミン市からカントーへ

三月半ばを過ぎたと言つのに未だ寒い成田を飛び立って、乾期の真盛りで暑いホーチミン市に降り立つ、市中の喧騒は相変わらずだ。卒業旅行中の日本人女学生の姿が目立つ。ホーチミン市の中心部は年々小綺麗になっている。観光客もそれ程減つていようには見えない。二〇〇〇年の同市の人口は五二二万人で、ベトナムで唯一の巨大都市である。第二位である首都ハノイの人口が二七四万であるから突出している。しかもホーチミン市は旧サイゴン市であり、早くから市場経済の洗礼を受け、社会主義計画経済の影響が最も少なかった都市で自由な雰囲気

市場と自由な空気に魅せられて外国企業の進出が最も多い。十一月までの統計であるが二〇〇二年の外国直接投資は対前比四七・七%減の十一億七〇〇〇万ドルであった。このうちホーチミン市二一%、隣のビンズオン省二〇%、ドンナイ省一九%と六〇%がホーチミン市とその周辺に集中している。首都ハノイは一〇%を占めるに過ぎない。ホーチミン市郊外では工業区の造成が行われ、新しく工場が建設中である。外国直接投資の流入が減少しているとは実感できない。

翌日メコン・デルタの中心都市カントーに向う。国道一号線一七〇キロを四時間かけて走る。まだフェリーで渡るところが一箇所あるがミートウアンの橋が出来たので、これでも早くなったのだ。時間がかかるのは道路が旧植民地時代からのもので幅員が狭く、その上物を運ぶ人や車の往来で混雑してスピードがだせないのである。それでも運転手はスピードを出そうとするので交通事故が多い。

道の両側には水田が広がっているが乾期なので多くは干いている。あちこちに水を張った水田があるのはえびの養殖をしているのである。目を見張るのは国道に沿って農家が整然と居を構えていることで昔は道路の両側に一面水田が広がっていたものだ。その家は赤い瓦葺き、煉瓦造りで壁は白く塗られている。殆んどがここ二、三年内に新築されたものであろう。軒先には必ずテレビ・アンテナが立っている。わずかに目にした草葺きの家の軒先にもテレビ・アンテナがあったことを思うと農民にとっては先ずテレビ、所得が増えたと家という順序である

う。

メコン・デルタの農民の所得水準は何によつて上昇したのであるうか。それは家屋敷を見れば分かる。道路沿いに集中しているのは農民がマーケットへのアクセスを問題にしているからである。筆者が見た限り、家があると右側がミカンやマンゴーなどの果樹園になって豚が遊んでおり、左側に池があつてあひると魚を飼っている。裏側に一寸した菜園みたいなものがあり、その先に広々とした水田がある。この形式の家屋敷が道路に沿つて続くのである。ある農村調査によると水田面積三ヘクタール、池一〇〇平方米、豚七匹、雌豚一匹を所有している。

またある農家は水田一・七ヘクタール、庭園〇・三ヘクタール、池五〇〇平方メートル、豚二匹を所有している。これから分るようにメコン・デルタの農民の経営は米作だけではなく多角経営化している。水田の作付方式も二期作および三期作から二期作+えび、米+砂糖きび、落花生などの作物+魚などと多角化している。

そのなかでえびと魚の養殖が多い。特に米の三期作は土壌の消耗が早く、米価が下落しているので、農民は米は二期作にしてえびや魚の養殖に転換したとのことである。二〇〇〇年の統計によると養魚生産においてメコン・デルタは全国の一七・七%、えび養殖においては七三・六%を占めている。そして二〇〇二年の水産品輸出額は二〇億ドルに達し、このうち米国へ三〇%、日本へ二五%が輸出されていると言つた。かつて原油と米はベトナムの二大輸出品であつたが、米のシェアは五%以下となり、今や水産品が輸出の一三%を占めている。米と魚やえびの地位

が逆転しているのである。これがメコン・デルタで起つている農業の多角化現象である。そしてこれを実現したのは、市場への距離を気にし、米価が低迷すれば資金を借りてもえび養殖に切替えるという価格に敏感な経営マインドのある農民達である。

カントーの街も賑わつていた。さすが農業地帯の中心地と言つべく、カントー大学農学部は活気があつた。日本も含めて各国との協同研究プロジェクトが進行中である。ホーチミン市への帰途、市中心部のバス・ターミナルへ行く。大型の車はフェリーを使わない近距離用が貸切り観光バスである。ホーチミン市行きは一〇人乗りのミニバンである。しかも一社ではなく、四社か五社が発発時間、所要時間、ホーチミン市内の到着地などで競争している。これらは皆、新興の民営株式会社で高速高品質のサービスを宣伝する。筆者が選んだのは三万五〇〇〇ドルのA社。五万ドルが相場だとのことである。日本でなら八人が一〇人のところを一四人詰め込まれた。道路が良くないとスピードを競つので丈夫なベンツを使つている。運転手に会社全体で何台のミニバンを使用しているかと聞いたところ四〇台との答えが帰つてきた。かなりの規模の会社である。メコン・デルタでは生産増、所得増を背景に交通部門でも民間企業が続々と生まれている。農民のなかにも土地を集積し、人を雇用して大規模経営に乗り出す企業が生まれている。活力に満ちた南部はベトナム経済成長のエンジンである。ベトナムの課題はこの活力を全土に拡げることであろう。

(きむらつてつさぶろう・国際関係学部教授)